

〈実践報告〉

## 同志社女子大学英語英文学科4年次生による シェイクスピア劇原語上演の歩みと展望

——70年を振り返って——

辻 英子

### Abstract

The performance of Shakespeare's plays in their original language by the 4th year students of the Department of English at DWCLA celebrated its 70th anniversary in 2020. It is needless to say that the history of Shakespeare performance has not been smooth-sailing, but has involved various challenges according to the situation of the department. In this paper, I would like to look back on how the content of the project and its position in the curriculum of the department have changed over the last seventy years and to examine current problems and the future of this course. First, I will classify the history of Shakespeare performance into four periods, and then I will examine what kind of attempts have been made and how the situation of Shakespeare performance in the department has changed in each period. Next, I will consider the significance and problems of this course in the current curriculum and propose some plans for improvement in the future.

### 序

本学の英語英文学科4年次生によるシェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) の劇の原語上演は昨年、2020年(令和2年)に70周年を迎えた。本来であれば、70周年を祝し、リユニオン等が行われるは

ずであったが、昨年はコロナ・ウィルスの世界的な蔓延のため、記念行事は中止となり、学生たちの舞台制作も準備段階から多くの困難を強いられる結果となった。本番では、フェイス・シールドの着用、観客数の大幅な制限等、従来にない配慮が必要であったが、一方でオンラインによる同時配信というかつてない手法も試みられ、遠隔地にいる卒業生の観劇を可能にするという予想外のメリットもあった。

そもそも本学におけるシェイクスピアの原語上演という取り組みはどのような経緯で生まれたのか。英語のネイティブ・スピーカーにとっても理解が難しいとされるシェイクスピアの戯曲を日本人学生が原語のまま上演するというこの野心的な試みの歴史を振り返ると、そこには、時代の状況に合わせ、苦心して様々に変革を重ねてきた軌跡が読み取れる。本稿では、現在、「シェイクスピア・プロダクション」という名称で英語英文学科3年次と4年次の2年間に渡って選択科目として置かれているこの取り組みについて、現在の担当者の一人としての立場から、その発端から現在までの歩みを振り返り、その内容や学科カリキュラム上の位置づけがどのように変化してきたのか、さらには、現状を見据えて、今後、どのような方向に進んでいくべきかを考察したい。

まず、シェイクスピア原語上演の歴史を、便宜上、4つの時期に分類し、それぞれの時期にどのような試みがなされてきたのか、上演作品、上演形態、学科内での位置づけの推移を見ていく。続いて現行カリキュラムの中でのこの取り組みの意義と問題点をあげ、これからの改善点について考えていく。なお、補足資料として末尾に上演年表を付けた。

## I 第1期（1951～1974）：学内上演から一般公開へ

戦後間もない1951年（昭和26年）2月22日、同志社女子大学の前身である同志社女子専門学校の最後の卒業生を送る卒業送別会が栄光館ファウラー・チャペルで行われた（同志社女子大学は1949年（昭和24年）に新制大学

となっている)。第1部の礼拝に続く第2部において、育児科、生活科の3年次生による卒業論文発表の後、英語科3年次生によって「英語劇『マクベス』より」というタイトルで劇が上演された。これが、本学のシェイクスピア原語上演の始まりである。

この試みの経緯については、1954年、第4回『マクベス』公演のパンフレットにディレクターの高田峯尾教授（1902-1973）の以下のような言葉がある。

Three years ago, the girls in the graduating class decided to interpret dramatically a part of their class work. It was indeed a brave attempt on their part, having nothing whatever to fall back upon, in the history of the school, either in the matter of acting or in that of décor. Nor did they have a regular coach for their rehearsals. We teachers are by no means a (sic) good stagemanagers. The girls had all sorts of troubles and tribulations, but in the end they came through practically unscathed.

(パンフレット『第4回 *Macbeth*』1954年 p.3)

上記で「卒業クラスの学生たちが授業で講読していた『マクベス』の一部を自分たちで実際に演じてみることにした」とあるように、この取り組みにはその発端から学生が積極的に関わっていたことが分かる。先に「ディレクターの高田教授」と述べたが、実は、初期の公演のパンフレット（第1回から第14回まで）には、高田教授をはじめとして劇を指導した教員たちの名前はディレクターとして明記されていない。その代わりに学生がディレクターやジェネラル・マネージャー、ステージ・マネージャーといった重要な肩書を与えられている。高田教授の名がディレクターとしてパンフレットに載るのは、1965年第15回の『ロミオとジュリエット』からである。これは、初期の上演では何よりも学生たちの活動が主であり、教員はあくまでアドバイザーとし

て黒子的な役割に徹していたことを示している。

もちろん、そのような試みを実現するためには、担当教員の熱意と実践力が必要であることは言うまでもない。これについては、尾崎寔教授(1935-2020)による「シェイクスピア・イブ25年の覚え書」というエッセイに、第1回公演における吉川順子(1905-1986)・高田峯尾両教授の貢献について以下のような推察がある。

それにしても、どうしてシェイクスピア劇のようなむずかしいものを、しかも英語で上演することになったのか。パンフレットによれば、『マクベス』を講読していた学生たちの間から、読むだけではあきたりない、上演してみたい、という声が起こってきた、ということになっている。これはこれで間違いないことだろうが、学生たちを自然にそこまで導いていったのは、吉川、高田両先生ではなかっただろうか。吉川先生は、ドラマの、教育における効用を強く意識しておられたし、高田先生といえば、広島女学院から同志社に来られたのが昭和24年5月である。『マクベス』を講じられて2年目、テキストのみを通じて、シェイクスピアを理解させることの困難、もどかしさが、英米でじかに演劇に接してこられた先生に、上演という方法を思いつかせたのではなかったか。

(『しばぐさ』第14号 1975年 p.24)

ハワイ生まれの日系2世である吉川順子教授による英語音声指導、そしてオックスフォード大学で修士号を取得し、毎夏、渡英して本場のシェイクスピアの舞台に精通していた高田峯尾教授の知見が学生たちを動かす大きな力になっていたことは想像に難くない。ともあれ、アクティブ・ラーニングという言葉が巷で喧伝される遙か昔から、本学では、教員の的確な指導による学生主体の英語教育が実践されていたといえるだろう。

1951年の『マクベス』上演を皮切りに、2年後の1953年2月16日には同志社女子大学第1回目の卒業生によって再び『マクベス』が今度は体育館で上演された。さらに同年11月にイブ行事の一環として、第3回目の『マクベス』

公演が「シェイクスピア・イブ」という名称で一般公開となり、再び栄光館に場所を移して上演されるようになる。このように大学の一学科の課外活動であるアマチュアの英語劇が観劇料を取って一般公開する学校行事となったことについては、当時、賛否両論があったのではないかと想像できる。そして女子学生による劇が単なる興味本位の見世物にならないよう担当教員が心を配っていたことが以下の高田教授の言葉からもうかがえる。

前からいく度も、毎年繰り返して来たように本学のシェクスピア劇はクラスの仕事の延長、言いかえれば研究発表と言うことになる。上手に演じられればこの上もないが、下手であったところでそれが努力の結晶であれば卑下することはないと思う。学生は素人であることを忘れてはいけない。ただショーとして見せようとするのは邪道である。本来の目的はショーではない。勿論学生達もこのことは十分に理解していると思う。私達は謙譲な心持で私たちの研究の結果を発表し、観客の皆様に見ていただくのである。

(パンフレット『第18回 *Macbeth*』1968年 p.8)

同様の見解は1961年第11回目の『ハムレット』上演でディレクターを務めた中村貢教授(1901-1984)の「SHAKESPEARE EVEの回顧—ファンの一—」という記事の中でも示されている。

言うまでもないがこれ等の上演が有意義である一番大切な点は、これらが決して単に見せるためのものではなく、教室での研究を更に進め、一層理解を進めるための実験手段として行われねばならぬことである。従ってこれは上演する学生達自身のためのものであることは言うを俟たない。私は以前よく学生諸君に対して、“of the students, by the students, for the students”という言葉でもってこのことを強調した。

(*Halcyon* 第9号 1967年 p.6)

このように、あくまでもアカデミックな研究の延長としてのシェイクスピア上演という取り組み姿勢は、上演作品の選び方にも表れている。1951年の第1回目から1957年の第7回目までは『マクベス』が、1958年の第8回目から1964年の第14回目までは『ハムレット』が連続して上演されている。しかしながらそこには単なる安易な繰り返しではなく、より充実したものを作っていくとする地道な積み上げのプロセスが見られる。例えば、初回の『マクベス』では、1幕3場、1幕5場、4幕2場、5幕1場の4つの場面が上演されているが、2回目の上演では、4幕2場を削り、新たに2幕1場、2幕2場を加えて5つの場面が上演されている。このようにして、年々上演場数を増やしていき、1957年の『マクベス』では、1幕1場～7場、2幕1場～3場、3幕4場、4幕2場、5幕1場と15場面にまで増やされている。続く1958年第8回目からの『ハムレット』も同様に、初回の11場面から1964年第14回目には当初なかった終幕の決闘の場も加えて14場面にまで増やされている。このように初期のシェイクスピア上演においては、劇としての完成した形にこだわるのではなく、あくまで授業の精読の延長としての作品理解を目指した堅実な取り組み姿勢が貫かれていることがわかる。

一方で、初期には学生たちの上演に加えて様々な試みがなされている。1953年から1955年までは、英文学科教職員による「ファカルティ・プレイ」として『ハムレット』の一場面が学生たちの劇の前座として上演されたり、1953年から1958年までは、ネイティブ教員による複数のシェイクスピア作品の「ドラマティック・リーディング」が行われている。また、1956年から1964年までは「ファカルティ・プレイ」に代わって、音楽学科の教員と学生によるエリザベス朝音楽の演奏が行われている。また、衣装の製作には家政学部の教員による尽力があり、当時のシェイクスピア上演が、英文学科のみならず、広く全学的な協力の元に行われていた大学行事であったことが分かる。

このようにして1951年から1964年の間にそれぞれ7年ずつ地道に積み上げ

られてきた『マクベス』と『ハムレット』に続き、翌年1965年第15回目には、新たに『ロミオとジュリエット』が加わり、1967年まで続けられる。その後、1968年に『マクベス』、1969年に『ハムレット』、1970年に『ロミオとジュリエット』、さらに1971年に『マクベス』と3つの作品が1年ごとに交替で演じられるようになる。

特筆すべきは1971年より、4年次に置かれていた必修科目「シェイクスピア研究」が3年次に置かれるようになったことである。それまでは4年次の前期（当時の前期は9月末まで）で作品講読を行い、まだ最後まで読み終わらないうちに、舞台の練習が始まっていた。さらに、10月から始まる後期の授業では、上演作品とは異なる劇をもう一つ講読しなければならなかった。つまり、学生たちは11月の上演時には別のシェイクスピア作品を並行して学んでいたのである。それが、この年から、3年次で1年かけて1つの作品を講読し、その後、4年次の春から上演準備に取り掛かることができるようになった。1年かけて1作品にじっくり取り組むことで戯曲への理解が深まり、上演準備にも時間的な余裕が持てるようになったはずである。この年は長年劇を指導してきた高田教授が翌年定年を迎えることもあり、ディレクターを新進気鋭の石田章教授（1928-2018）へとバトンタッチしている。この年以降、石田章教授と尾崎寔教授が2年交代でディレクターを担う時代が1983年まで続く。1972年と1973年には新たに四大悲劇の一つ『オセロー』が演目に加わり、翌年には再び『ロミオとジュリエット』と続き、少しずつレパートリーを広げながら、若い二人の教員が中心となってシェイクスピア上演を新たな方向へと牽引していくことになる。

## Ⅱ 第2期（1975～1990）：正規科目化とレパートリーの拡大

1975年第25回目は『ハムレット』であったが、この年、シェイクスピア上演の歴史に大きな変化が起こる。それまでは、3年次の必修科目「シェイクスピア研究」を履修した翌年、4年次生有志によって行われる課外活動であっ

た「シェイクスピア・イブ」が「シェイクスピア・プロダクション」という名称で、週2日通年2単位の自由選択科目として英文学科の正規カリキュラムに編入されることになったのである。この決断については、学科内でかなり強い反対意見があったと聞いている。ありていに言えば、「クラブ活動の延長のようなものを演劇専門でもない学科の正規科目にする必要があるのか」といったところではないだろうか。そのような反対にもかかわらず、学科科目になった大きな理由は、この取り組みに参加する者たち、とりわけ担当教員の負担が課外活動として続けていくにはあまりにも大きくなっていったということであろう。1970年代半ば、教員が大学運営に関わる業務も飛躍的に増え、授業と研究以外の時間を課外活動としての舞台制作作業に割く余裕はなかったと想像できる。正規科目化について、尾崎教授は当事者として、先に紹介した「シェイクスピア・イブ25年の覚え書」というエッセイの最後で次のように述べている。

今年から新カリキュラムの完成とともに、この行事はついに「シェイクスピア・プロダクション」という1つの学科科目になった。そうなるまでも賛否両論あったが、これは進歩なのか、後退なのか、今判断できることではないし、またすべきでもない。4分の1世紀続いたこの催しが、さらに半世紀のよわいを数えるまで生き続けたときには、新たな回顧がこころみられ、すべてにわたって評価が下されることだろう。

(『しばくさ』第14号 1975年 p.28)

シェイクスピア上演が正規の学科科目になったことが、「進歩なのか、後退なのか」、これについては様々な捉え方があると思われるが、少なくとも開始から25年が経った時点で、この取り組みは、もうすでに学科の伝統行事として少なからぬ存在感を持っており、中止するという選択肢は考えられなかったに違いない。

ともかくもこのようにして正規カリキュラムに取り込まれてからのシェイ

クスピア上演には、また、大きな変化が起こっている。それは演目が悲劇から喜劇中心となり、同時に毎年、異なった作品が演じられるようになったことである。1976年第26回目に初めて喜劇『十二夜』が上演され、翌年から1980年まで、『夏の夜の夢』、『お気に召すまま』、『ベニスの商人』、『じゃじゃ馬ならし』というように次々と新しい作品が追加され、舞台の印象もそれまでのストイックで重厚なイメージから一気に華やかで軽快なものへと変化を遂げている。さらにこの時期には、上演場所も学外へと広がっていく。1981年第31回目の『十二夜』は栄光館での本番後、東京で上演を行い、翌年の『夏の夜の夢』も西陣会館で追加公演を行っている。1983年には『ロミオとジュリエット』が復活したが、1984年から1990年まで上演されたのはは全て喜劇である。1984年第34回目の『じゃじゃ馬ならし』では園ジャネット教授(1946-2019)<sup>1</sup>が新たにディレクターに加わり、この女性蔑視ともいえる喜劇をフェミニズムの視点で小気味よくアレンジしているのも興味深い。

このように上演作品が喜劇一辺倒になった背景には、時代の流行もあるのかもしれないが、正規科目化したことも理由の一つとしてあげられるかもしれない。というのも、シェイクスピアの悲劇では、タイトルに示されている主要人物に焦点があてられているため、台詞の量が他の役に比べて圧倒的に多く、キャストの学生間の台詞の量に大きな差が出る。一方、喜劇の場合は、タイトルからも察せられるように、はっきりとした主役というものが特定しにくい群集劇なので、それぞれの役の台詞の量に悲劇ほどの差がなく、学生たちに比較的バランスよく台詞を配分することができる。成績評価の必要のない課外活動とは異なり、正規科目となった以上は、全ての受講生に可能な限り、均等な量の課題を与え、公正に評価することが求められる点を考えれば、喜劇の方が教材として扱いやすいと言えるだろう。1985年には科目の単位数も2単位から4単位へと増え、学科カリキュラムの中で授業としての存在感も増してくる中で、できるだけ多くの履修生にバランスよく台詞を配分することがこの時代の担当者の念頭にあったのかもしれない。

一方で、「泣かせる芝居」より「笑わせる芝居」の方がはるかに難しいとよく言われるように、悲劇より喜劇の方が、上演の際の難易度が高いことは言うまでもない。観客を笑わせるためには、ただ台本通りに演じるだけではなく、その場の空気を読む絶妙な「間」の取り方が必要であるし、何よりもシェイクスピア時代の滑稽な言葉遊びや時事的なジョーク等を、現代の日本人に的確に伝えることは至難の業であるだろう。さらに悲劇に比べて猥雑な要素がはるかに多い喜劇作品を舞台化するにあたり、初期の教員たちが懸念していた「見世物」ではなく「アカデミックな研究発表」にするために、当時の担当者が苦心したであろうことは容易に想像できる。

ともあれ、初期の悲劇の地道な積み重ねによって縦方向へと深くしっかりと根を張ってきたシェイクスピア上演はその堅実な伝統の力を基盤として、今度は喜劇というジャンルに移行しながら横方向へ伸び伸びとその枝葉を広げていったと言えるだろう。

### Ⅲ 第3期 (1991～2008)：京田辺キャンパスでの新たな挑戦

1991年、英文学科が京田辺キャンパスへと移転したことを契機に、41回目の上演は初心に戻って第1回の上演作品である『マクベス』が演じられた。本格的な照明機材や舞台装置を備えた新島記念講堂で上演するためには、舞台制作についての知識と時間とエネルギーがそれまで以上に要求されるようになった。この時期は第2期に引き続き、基本的には喜劇が多く選ばれたが、『マクベス』が2回、『ハムレット』が1回、『ロミオとジュリエット』が3回とかつての悲劇も復活している。更に2001年第51回目には、シェイクスピア晩年のロマンス劇である『冬物語』が新たにレパートリーに加えられ、演目は計11作品にまで広がった。

田辺キャンパス移転して4年目の1994年、本学のシェイクスピア上演にとってさらなる大きな変化が起こる。それは、同年のカリキュラム改正に伴い、3年次の必修科目であった「シェイクスピア研究」(通年)が廃止され、代

わりに「シェイクスピア・プロダクションⅠ」（通年）という自由選択科目になったことである。そして、4年次の「シェイクスピア・プロダクション」（通年）が「シェイクスピア・プロダクションⅡ」（通年）という名称になり、3年次の講義と講読を中心とした作品研究も4年次での上演を念頭に置いたものとなり、基本的に舞台制作に関わりたい学生のみが参加する2年間連続のプロジェクトという色合いを帯びるようになった。

このカリキュラム改正では、長らく英文学科の核であった4年次の必修科目である「ミルトン研究」も廃止された。同時に学科名が「英文学科」から「英語英文学科」へと「英語」という言語を強調するものに名称変更されたことからわかるように、この時期以降、カリキュラムからは、「文学」の分野が大きく削減され、全体としてより実践的な英語スキルの習得に力を入れる方向へと進んでいく。

シェイクスピアを読むことが学科の3年次生にとって必須ではなくなったということは、学生たちが4年次になり、劇が上演される際に、その作品に対する理解や親しみが以前のように持てなくなるということであり、学科の中でのシェイクスピアの浸透力が弱まったことを意味する。このようにカリキュラムの中では「文学としてのシェイクスピア研究」は後退してしまった一方で、皮肉なことにとすべきか、この時期、上演の部分は反対に拡大し、学外へ向けてかつてないアピールをすることになる。

このようなカリキュラム改正の背景には、1980年代後半から1990年代前半にかけてのバブル景気とその崩壊という日本社会における大きな変化があることは言うまでもない。1991年に文部科学省より通達された設置基準の大綱化により、大学は自らの責任によって大きな見直しを迫られることになった。多くの大学が学部名称を変更し、いわゆる教養教育が軽視される方向へと進んでいく。

1990年代前半のバブルの崩壊により、企業の倒産・統廃合が相次ぐ中、大学は生き残りをかけて拡大路線を選んでいく。18歳人口の減少に伴い、多く

の大学が受験生獲得のため、広報活動にかつてなく力を入れていくが、本学も例外ではなく、その流れの中にシェイクスピア上演も加えられたのである。1994年第44回目の『夏の夜の夢』は福岡で、翌年第45回の『ハムレット』は大阪で、それぞれ本公演後に学外公演を行い、学科の広告塔としての役目を果たすことになった。

1994年の福岡公演を機に、はじめて「日本語字幕」も導入された。これは、学外の観客にシェイクスピアをよりよく理解してもらうための工夫であったが、それまで英語劇を敬遠していた他学科生やさらには近隣の高校生なども含めて総じて観客数の増加という結果をもたらした。しかしながら、これ以降、本学で上演されるシェイクスピア劇は、たとえ4年次生であっても、上演に関わる当事者以外は「日本語字幕がなければ理解できない」難しいものになってしまったことも事実である。

1999年にはさらなるカリキュラム改正で4年次の「シェイクスピア・プロダクションⅡ」はついに8単位となる。2000年には全学のセメスター制導入に伴い、3年次の春学期が「シェイクスピア・プロダクションⅠ」、秋学期が「シェイクスピア・プロダクションⅡ」とそれぞれ2単位の科目となり、4年次は「シェイクスピア・プロダクションⅢ」（8単位）となった。4年次の舞台制作にかかる時間を考えれば、8単位でも足りないというのが実情ではあるが、一方で3年次の必修であった文学講読としての「シェイクスピア研究」が廃止された現在、選択科目の一つに過ぎない4年次の上演のみがカリキュラムの中でそこまでの大きな割合を占めていることの是非は問われる必要があるのかもしれない。

#### Ⅳ 第4期（2009～）：今出川での再出発—シェイクスピアの原点へ—

2009年、英語英文学科は今出川キャンパスへと戻ることになり、シェイクスピア劇は再び、栄光館ファウラー・チャペルでの上演となった。新島記念講堂と比べて舞台も狭く、上演のための設備は皆無といえる栄光館での作業

は当初、戸惑いの連続であった。しかしながら、シェイクスピア劇は本来、舞台装置や照明など何もない簡素な舞台上で上演されていたし、何よりも本学のシェイクスピア上演が始まったのはこの栄光館である。その意味では、原点回帰であり、初心に戻って再出発するにはふさわしい環境であったと言える。

幸いなことに照明に関しては、2009年から2017年まではプロの照明家である山口久雄氏の、2018年以降は澤井敦治氏の協力を得ている。また、かつては音楽学科の教員に協力を求めている発声指導に関しても1989年以降は学外講師である五十川啓子氏に指導を仰いでいる。

カリキュラム上は8単位という大きな割合を占める4年次の舞台制作作業は、現実には上記のように専任の担当教員だけでは指導しきれないものになっているのが実情である。石田・尾崎両教授が退職後、園教授と筆者の二人だけでこの取り組みを支えなければいけなくなった時期に専任教員として加わった桑山智成専任講師（現京都大学教授）には、退職後も嘱託講師として数年間上演を支えてもらったことも付記しておきたい。

## V 現状と今後の課題

かつては、すくなくとも3名以上の教員が関わっていたシェイクスピア上演も、現在は2013年よりディレクターに加わったティモシー・L. メドロック (Timothy L. Medlock) 准教授と筆者の2名だけで、2年ごとに交替して担当している。元々講義と講読中心であった3年次の授業も、昨今の大学における実学志向の傾向の中、英語スキルの向上を求められることやアクティブ・ラーニングという掛け声のもとに英語教育に演劇的手法を取り入れることの効果が注目されることもあり、講義と講読に加えて台詞の音読練習などにより多くの時間を割き、4年次での上演により直結する形となっている。

今日では You Tube などの豊富な動画教材が簡単に入手できることもあり、

受講生にとって舞台上演のための手本とするべきものは以前よりふんだんに手に入る。しかしながら、一方で3年次での作品の精読・文法の説明に費やす時間は当然のことながら以前より少なくなっている。400年前の初期近代英語は、文体も、個々の単語の意味も、辞書を使った入念な読解を抜きにしては理解が難しい。テキストの丁寧な読みと英語音声表現の訓練をどのようにバランスよく行っていくかがこれからの課題の一つであろう。

更にこれは初期のころから抱えてきた問題だと思うが、キャストとスタッフで活動内容に大きな差があることである。演劇という総合芸術においては、スタッフの仕事もキャストに劣らず重要である。しかしながら、本学科の正規の授業である以上、英語力の向上は必須であり、受講生には可能な限り均等に英語音声表現の訓練の機会を持たせるべきではないかと考える。かつて筆者は3年次と4年次のゼミでオスカー・ワイルド (Oscar Wilde, 1854-1900) やソーントン・ワイルダー (Thornton Wilder, 1897-1975) の劇の上演を行った経験があるが、その場合、オーディションなどは行わず、一つの役を希望する学生数人で幕ごとに役を分担するというシステムで、ゼミ生全員にキャストとスタッフの両方を可能な限り均等に兼任させていた。その結果、学生たちの上演後の達成感と何よりも連帯感が高くなった。

シェイクスピア劇も同様に、一人でも多くの学生に舞台の上と舞台の裏の仕事の両方を経験させる方向へと進んでいくことがより良い教育効果を生むように思われる。シェイクスピアの原語上演が、舞台制作活動であると同時に、あくまで、英語英文学科の正規のカリキュラムとして置かれた教育的プログラムである限り、受講生の英語音声表現力を高める機会を平等に与えることが何よりも重要であるだろう。

最後に、現在の「シェイクスピア・プロダクションⅢ」が抱えるもう1つの問題について触れておきたい。この取り組みが正規科目になったことについてかつて尾崎教授は「進歩なのか後退なのか」と述べたが、今、その言葉がかつてない重みを持ってきている。というのも、正規科目となったことが

逆に意欲のある受講生の参加を阻むという現象がここ数年起こっているからである。近年、大学における実学志向の状況の元、英語英文学科でも、学生たちに可能な限り多彩な選択肢を提供するべく、教職や資格のための授業を以前より潤沢に置いている。それらの授業が時間割の関係上、火曜と金曜の4講時に置かれている4年次の「シェイクスピア・プロダクションⅢ」と重なり、教員志望や様々な資格取得に熱心な学生たちが、この授業の履修を断念せざるを得なくなっているのである。

この状況を改善するためには、現行の週2回8単位の授業を週1回4単位に減らし、その分、台本も短くして舞台制作にかかる時間とエネルギーを少なくしていくという選択肢もあるのかもしれない。同時に、シェイクスピア劇を限られた学生だけではなく、下級生や4年次で履修していない学生にも親しんでもらうために、複数の作品の有名なセリフの一部を朗読発表してもらうような機会も持っていきたいかもしれない。

リベラル・アーツという大学の基本理念の死守と実学志向という社会におけるニーズへの対応、本来相容れることが難しいこの二つの方向に対してその両方に答えるべく、英語英文学科では、時に苦渋の選択をしながら、学科として生き残るべく幾度に渡るカリキュラムの変更を余儀なくされてきた。「シェイクスピア・プロダクション」もまさにそのようなカリキュラムの変遷の中で様々にその形を変えてきたと言える。現在、学生たちの選択肢が増えていく中で、シェイクスピア劇を用いた教育も学科の実情に合わせ、今一度、新たな方向を模索していく必要があるのではないだろうか。

\*本稿は、2018年2月21日（水）の同志社女子大学第9回アクティブ・ラーニング研究会での報告内容を元に、大幅な加筆・修正を加えたものである。

## 注

1. 園ジャネット教授の名前の表記は巻末の表では、Janet Sono となっている。

引用・参考資料

Shakespeare Production 50周年記念行事実行委員会編『Shakespeare Production  
—50年の歩み—』、同志社女子大学英語英文学科、2000年。

中村貢「SHAKESPEARE EVE の回顧—ファンの一人として—」、『*Halcyon*』、第  
9号、同志社女子大学英文学会、1967年、pp.4-6.

尾崎寔「シェイクスピア・イブ25年の覚え書」、『しばぐさ』、第14号、同志社女子大学、  
1975年、pp.23-28.

高田峯尾「INTORODUCTION」(sic)、『第4回 *Macbeth*』、1954年、p.3.

-----、「Shakespeare 劇上演について」、『第18回 *Macbeth*』、1968年、p.8.

辻英子「シェイクスピア・プロダクション」、『The Roots 継の章—行事・制度編—』、  
同志社女子大学広報課、2016年、pp.23-24.

## 添付資料

## シェイクスピア劇上演年表

(『Shakespeare Production—50年の歩み—』を元に加筆・修正を加えた。)

	上演年	上演作品	ディレクター (敬称略)	上演日時・ 場所	参加 学生数	備 考  (敬称略)
1	1951	『マクベス』 ( <i>Macbeth</i> )	高田 峯尾	2月22日 栄光館	16名	・同志社女子専門学校英語科最後の卒業生によって、一般公開ではなく、卒業送別会で上演された
2	1953	『マクベス』 ( <i>Macbeth</i> )	高田 峯尾	2月16日 体育館	28名	・同志社女子大学第1回卒業生による上演
3	1953	『マクベス』 ( <i>Macbeth</i> )	高田 峯尾	11月13日 栄光館	32名	・Shakespeare Eve という名称で一般公開となる ・Faculty Play: <i>Hamlet</i> ・Recitation: <i>A Midsummer Night's Dream</i>
4	1954	『マクベス』 ( <i>Macbeth</i> )	高田 峯尾	11月12日 栄光館	30名	・Faculty Play: <i>Hamlet</i> ・Dramatic Reading: <i>Merchant of Venice</i>
5	1955	『マクベス』 ( <i>Macbeth</i> )	高田 峯尾	11月11日 栄光館	60名	・Faculty Play: <i>Hamlet</i> ・Dramatic Reading: <i>The Taming of the Shrew</i>
6	1956	『マクベス』 ( <i>Macbeth</i> )	高田 峯尾	11月10日 栄光館	58名	・Shakespeare Songs (音楽科学生) ・Dramatic Reading: <i>Hamlet</i>
7	1957	『マクベス』 ( <i>Macbeth</i> )	高田 峯尾	11月9日 栄光館	93名	・Shakespeare Songs (音楽科学生) ・Dramatic Reading: <i>Othello</i>
8	1958	『ハムレット』 ( <i>Hamlet</i> )	高田 峯尾	11月15日 栄光館	132名	・Sixteenth Century Melodies, Songs from Shakespeare (音楽科学生) ・Dramatic Reading: <i>As You Like It</i>
9	1959	『ハムレット』 ( <i>Hamlet</i> )	高田 峯尾	11月14日 栄光館	153名	・Music of the Elizabethan Era (音楽科学生)
10	1960	『ハムレット』 ( <i>Hamlet</i> )	高田 峯尾	11月12日 栄光館	165名	・協力：同志社大学フェンシング部
11	1961	『ハムレット』 ( <i>Hamlet</i> )	中村 貢	11月11日 栄光館	193名	・Music of the Elizabethan Era (音楽科学生)
12	1962	『ハムレット』 ( <i>Hamlet</i> )	高田 峯尾	11月10日 栄光館	194名	・Music of the Elizabethan Era (音楽科学生)
13	1963	『ハムレット』 ( <i>Hamlet</i> )	高田 峯尾	11月9日 栄光館	187名	・Music of the Elizabethan Era (音楽科学生)
14	1964	『ハムレット』 ( <i>Hamlet</i> )	高田 峯尾	11月14日 栄光館	187名	・Music of the Elizabethan Era (音楽科学生) ・協力：同志社大学フェンシング部
15	1965	『ロミオとジュリエット』 ( <i>Romeo and Juliet</i> )	高田 峯尾	11月13日 栄光館	68名	・協力：同志社大学フェンシング部 ・セット・メイク指導：読売テレビ美術部 ・ダンス指導：春日バレエ研究所

180 同志社女子大学英語英文学科4年次生によるシェイクスピア劇原語上演の歩みと展望

16	1966	『ロミオとジュリエット』 ( <i>Romeo and Juliet</i> )	高田 峯尾	11月12日 栄光館	172名	・協力：同志社大学フェンシング部 ・メイク指導：読売テレビ美術部 ・セット指導：日本ステージ(株) ・ダンス指導：春日バレエ研究所
17	1967	『ロミオとジュリエット』 ( <i>Romeo and Juliet</i> )	高田 峯尾	11月11日 栄光館	164名	・協力：同志社大学フェンシング部
18	1968	『マクベス』 ( <i>Macbeth</i> )	高田 峯尾	11月9日 栄光館	140名	
19	1969	『ハムレット』 ( <i>Hamlet</i> )	高田 峯尾	11月8日 栄光館	98名	
20	1970	『ロミオとジュリエット』 ( <i>Romeo and Juliet</i> )	高田 峯尾	11月6・7日 栄光館	109名	
21	1971	『マクベス』 ( <i>Macbeth</i> )	石田 章	11月5・6日 栄光館	72名	
22	1972	『オセロー』 ( <i>Othello</i> )	石田 章	11月10・11日 栄光館	65名	
23	1973	『オセロー』 ( <i>Othello</i> )	尾崎 寔	11月9・10日 栄光館	62名	
24	1974	『ロミオとジュリエット』 ( <i>Romeo and Juliet</i> )	尾崎 寔	11月9日 栄光館	76名	
25	1975	『ハムレット』 ( <i>Hamlet</i> )	石田 章	11月7・8日 栄光館	52名	・「Shakespeare Production」の名称で、自由選択科目としてカリキュラムの中に正規に編入される
26	1976	『十二夜』 ( <i>Twelfth Night</i> )	石田 章	11月12・13日 栄光館	60名	
27	1977	『夏の夜の夢』 ( <i>A Midsummer Night's Dream</i> )	尾崎 寔	11月11・12日 栄光館	45名	・協力：同志社大学フェンシング部
28	1978	『お気に召すまま』 ( <i>As You Like It</i> )	尾崎 寔	11月10・11日 栄光館	40名	
29	1979	『ベニスの商人』 ( <i>The Merchant of Venice</i> )	石田 章	11月9・10日 栄光館	34名	
30	1980	『じゃじゃ馬ならし』 ( <i>The Taming of the Shrew</i> )	石田 章	11月7・8日 栄光館	32名	
31	1981	『十二夜』 ( <i>Twelfth Night</i> )	尾崎 寔	11月6・7日 栄光館 11月26・27日 渋谷東邦生命ホール	36名	・協力：同志社大学フェンシング部

32	1982	『夏の夜の夢』 ( <i>A Midsummer Night's Dream</i> )	尾崎 寔	11月6日 栄光館 11月14日 西陣織会館	54名	
33	1983	『ロミオとジュリエット』 ( <i>Romeo and Juliet</i> )	石田 章	11月25・26日 栄光館	41名	
34	1984	『じゃじゃ馬ならし』 ( <i>The Taming of the Shrew</i> )	Janet Sono	11月16・17日 栄光館	50名	・協力：吉岡 康樹（デザイナー） 音楽学科3年次生古楽アンサンブル 放送部
35	1985	『お気に召すまま』 ( <i>As You Like It</i> )	Janet Sono	11月15・16日 栄光館	41名	・協力：音楽学科3年次生古楽アンサンブル 放送部
36	1986	『じゃじゃ馬ならし』 ( <i>The Taming of the Shrew</i> )	Janet Sono	11月14・15日 栄光館	46名	・協力：放送部 植野 真奈美（音楽科4年次生） E.S.S.
37	1987	『から騒ぎ』 ( <i>Much Ado About Nothing</i> )	石田 章	11月13・14日 栄光館	40名	・賛助出演：萬 智子（音楽学科卒業生） （リュート演奏）
38	1988	『十二夜』 ( <i>Twelfth Night</i> )	石田 章	11月11・12日 栄光館	41名	
39	1989	『ベニスの商人』 ( <i>The Merchant of Venice</i> )	Janet Sono	11月17・18日 栄光館	54名	・発声指導：五十川 啓子
40	1990	『夏の夜の夢』 ( <i>A Midsummer Night's Dream</i> )	Janet Sono	11月16・17日 栄光館	63名	・40周年記念行事実施（リュニオン） ・発声指導：五十川 啓子
41	1991	『マクベス』 ( <i>Macbeth</i> )	辻 英子	11月15・16日 新島記念講堂	45名	・田辺キャンパスへ移転 ・発声指導：五十川 啓子 ・協力：同志社大学フェンシング部
42	1992	『十二夜』 ( <i>Twelfth Night</i> )	Janet Sono	11月13・14日 新島記念講堂	52名	・協力：同志社大学フェンシング部
43	1993	『ロミオとジュリエット』 ( <i>Romeo and Juliet</i> )	Janet Sono	11月6日 栄光館 11月12・13日 新島記念講堂	55名	
44	1994	『夏の夜の夢』 ( <i>A Midsummer Night's Dream</i> )	尾崎 寔	11月11・12日 新島記念講堂 11月18・19日 大博多ホール	66名	・英語英文学科へ名称変更 ・日本語字幕（35ミリスライド）を開始 ・劇中に手話を取り入れる試み ・協力：田辺ろうあ協会婦人部 田辺町役場福祉部民生課
45	1995	『ハムレット』 ( <i>Hamlet</i> )	尾崎 寔	11月10・11日 新島記念講堂 11月18日 大阪リサイタルホール	70名	・協力：同志社大学フェンシング部 田辺ろうあ協会婦人部 田辺町役場福祉部民生課

182 同志社女子大学英語英文学科4年次生によるシェイクスピア劇原語上演の歩みと展望

46	1996	『じゃじゃ馬ならし』 ( <i>The Taming of the Shrew</i> )	Janet Sono	11月8・9日 新島記念講堂 11月16日 栄光館	40名	・発声指導：五十川 啓子 ・Lute 指導：岡本 一郎 (音楽学科講師)
47	1997	『十二夜』 ( <i>Twelfth Night</i> )	辻 英子	11月7・8日 新島記念講堂	45名	・発声指導：五十川 啓子 ・協力：同志社大学フェンシング部
48	1998	『ロミオとジュリエット』 ( <i>Romeo and Juliet</i> )	尾崎 寔	11月6・7日 新島記念講堂	50名	・発声指導：五十川 啓子 ・格闘指導：諸鍛冶 裕太 ・協力：同志社大学フェンシング部
49	1999	『お気に召すまま』 ( <i>As You Like It</i> )	Janet Sono	11月6日 栄光館 11月12・13日 新島記念講堂	47名	・発声指導：五十川 啓子 ・声楽指導：玉木 康之
50	2000	『夏の夜の夢』 ( <i>A Midsummer Night's Dream</i> )	尾崎 寔	11月10・11日 新島記念講堂 11月18日 栄光館	41名	・50周年記念行事実施 (記念誌『Shakespeare Production - 50年の歩み-』発行、展示、リユニオン)
51	2001	『冬物語』 ( <i>The Winter's Tale</i> )	辻 英子	11月16・17日 新島記念講堂	67名	・発声指導：五十川 啓子
52	2002	『ベニスの商人』 ( <i>The Merchant of Venice</i> )	Janet Sono	11月15・16日 新島記念講堂	42名	・衣装指導：馬杉 一重 (元本学教授) ・発声指導：五十川 啓子
53	2003	『お気に召すまま』 ( <i>As You Like It</i> )	辻 英子	11月14・15日 新島記念講堂	49名	・歌唱指導：中村 利男 (本学教授) ・衣装指導：馬杉 一重 (元本学教授) ・発声指導：五十川 啓子 ・手話指導：藤井 進 (花園大学非常勤講師元京都府舞学校教諭) ・字幕にパワー・ポイントを使用
54	2004	『マクベス』 ( <i>Macbeth</i> )	Janet Sono	11月12・13日 新島記念会館	65名	・発声指導：五十川 啓子
55	2005	『ロミオとジュリエット』 ( <i>Romeo and Juliet</i> )	尾崎 寔	11月11日 新島記念講堂 11月13日 同志社大学 寒梅館	83名	・演技指導：桑山 智成 ・格闘指導：諸鍛冶 裕太
56	2006	『夏の夜の夢』 ( <i>A Midsummer Night's Dream</i> )	辻 英子	11月10・11日 新島記念講堂	49名	・発声指導：五十川 啓子
57	2007	『十二夜』 ( <i>Twelfth Night</i> )	桑山 智成	11月16・17日 新島記念講堂	46名	・発声指導：五十川 啓子
58	2008	『お気に召すまま』 ( <i>As You Like It</i> )	Janet Sono 桑山 智成	11月14・15日 新島記念講堂	40名	・発声指導：五十川 啓子 ・京田辺キャンパス最後の公演を記念して “Friends of Shakespeare”を開催

59	2009	『夏の夜の夢』 ( <i>A Midsummer Night's Dream</i> )	辻 英子	11月6・7日 栄光館	43名	・今出川へ再移転 ・表象文化学部にて学部名変更 ・発声指導：五十川 啓子 ・照明指導：山口 久雄
60	2010	『ロミオとジュリエット』 ( <i>Romeo and Juliet</i> )	Janet Sono 桑山 智成	11月5・6日 栄光館	37名	・発声指導：五十川 啓子 ・照明指導：山口 久雄
61	2011	『十二夜』 ( <i>Twelfth Night</i> )	辻 英子	11月4・5日 栄光館	42名	・発声指導：五十川 啓子 ・照明指導：山口 久雄 ・発音指導：桑山 智成 今井 由美子 ・字幕指導：J. W. Carpenter
62	2012	『お気に召すまま』 ( <i>As You Like It</i> )	辻 英子	11月2・3日 栄光館	42名	・発声指導：五十川 啓子 ・照明指導：山口 久雄 ・照明補佐：羽山 映子 ・発音指導：桑山 智成 Thomas O'Connor 今井 由美子
63	2013	『夏の夜の夢』 ( <i>A Midsummer Night's Dream</i> )	辻 英子 Timothy L. Medlock	11月8・9日 栄光館	55名	・発声指導：五十川 啓子 ・照明指導：山口 久雄 ・発音指導：今井 由美子
64	2014	『冬物語』 ( <i>The Winter's Tale</i> )	Timothy L. Medlock 辻 英子	11月7・8日 栄光館	45名	・発声指導：五十川 啓子 ・照明指導：山口 久雄 ・発音指導：今井 由美子
65	2015	『から騒ぎ』 ( <i>Much Ado About Nothing</i> )	Timothy L. Medlock	10月30・31日 栄光館	40名	・発声指導：五十川 啓子 ・照明指導：山口 久雄 ・字幕指導：辻 英子 ・アドバイザー：布施 邦子
66	2016	『十二夜』 ( <i>Twelfth Night</i> )	Timothy L. Medlock	11月4・5日 栄光館	30名	・発声指導：五十川 啓子 ・照明指導：山口 久雄 ・字幕指導：辻 英子
67	2017	『夏の夜の夢』 ( <i>A Midsummer Night's Dream</i> )	辻 英子	11月3・4日 栄光館	35名	・発声指導：五十川 啓子 ・照明指導：山口 久雄 ・発音・演技指導：Timothy L. Medlock
68	2018	『冬物語』 ( <i>The Winter's Tale</i> )	辻 英子	11月2・3日 栄光館	41名	・発声指導：五十川 啓子 ・照明指導：沢井 敦治 ・発音指導：Timothy L. Medlock
69	2019	『お気に召すまま』 ( <i>As You Like It</i> )	Timothy L. Medlock	11月1・2日 栄光館	40名	・発声指導：五十川 啓子 ・照明指導：沢井 敦治 ・字幕指導：辻 英子
70	2020	『ロミオとジュリエット』 ( <i>Romeo and Juliet</i> )	Timothy L. Medlock	11月6・7日 栄光館	38名	・照明指導：沢井 敦治 ・字幕指導：辻 英子 コロナ禍により一般公開を中止。 観客を学科生に絞り、申込制にして大幅に制限。 オンライン同時配信 (11月7日)